

. 序論

第 1 章

本研究の目的

8世紀前半頃から16世紀前半頃までにわたって、インドネシア、ジャワ島の中・東部において、インドの文化的な影響を摂取してヒンドゥー教及び仏教の諸王朝が栄えた時代は「古代」ないし「ヒンドゥー・ジャワ期」、またそれらの王朝が造りだした宗教芸術は「ヒンドゥー・ジャワ芸術」と呼び習わされてきた。ヒンドゥー・ジャワ期は、肥沃なオパック川、プロゴ川の流域、すなわちジャワ中部に文化的・政治的な中心のあった「中部ジャワ期」(8世紀前半頃～10世紀前半頃)と、王宮及び都が東部ジャワに移され後、広大なプランタス川流域を中心に文化の栄えた「東部ジャワ期」(10世紀前半頃～16世紀前半頃)とに二分される。

ヒンドゥー・ジャワ芸術の数ある遺品の内、石造ないし煉瓦造の宗教建造物は「チャンディ」と総称されている。チャンディに関する建築学的な研究は、19世紀末から20世紀の前半期にかけて、旧宗主国のオランダによって組織されたオランダ領東インド考古局によって着手され、主要な各遺構についての基本的な理解はほぼその時期に確立している。その後、インドネシア本国の、あるいは欧米の諸研究者を中心として、またわが国の千原大五郎博士をも含めて研究の推進が試みられてきた。しかしこのように一世紀以上にもわたる研究史を持つにもかかわらず、分厚い建築学的な研究の蓄積が残されてきたとは必ずしも言い得ない状況にある。インドネシアの独立に伴ってオランダ領東インド考古局が消滅し、オランダ人局員の殆どは帰国、その後インドネシア人によって継承された文化財保護行政も、考古学的視点からの調査・研究に偏重してきたきらいがある。チャンディは地上に露出している建造物ではあっても、研究対象としては考古学の範疇にカテゴライズされ、ことにインドネシアでは建築学の研究者による先行研究に乏しい。インドネシア以外の国の研究者で、建築を専門とする各位にしても、やはりその絶対数が少なかったと言わねばならない。建築の様式分類に基づく遺構の編年的な考察は行われてきたが、議論を差し挟む余地のない定見として通用するものとは言い難い側面もある。

特筆されるのはジャック・デュマルセ氏を中心とするフランス極東学院による一連の研究であり、遺跡に残された痕跡の復元的な考察による編年的研究、さらに構法・工法的な観点からの分析などについても、評価に値する先駆的な業績を残している。

チャンディの編年的研究の難しさの一つは、とりわけ中部ジャワ期の遺跡群に関して言えば、その創建年代を直接的に推測し得る根拠となる刻文などの資料が著しく乏しいことにある。従ってチャンディの編年を試考する際には、遺構の分析から得られる情報を手掛かりとしつつも、文献的研究に基づく中部ジャワ史の解釈にも拠りながら、遺構を各々の年代に布置していくという作業が求められる。しかし肝心の中部ジャワ史自体が、新資料の発見によって大きく書き換えられる余地が残されているものであり、現に近年の刻文研究の成果は全く異なる枠組みの中で中部ジャワ史の再構成を試みている。先述のデュマルセによる研究も、遺構に残された痕跡の意味を建設工程との連関で実証するという点で、その着眼の鋭さに驚かされることもしばしばであるが、それらの事象を建築史として通時的に構成する際に、彼が拠って立つ中部ジャワ史がおよそ半世紀も前の解釈であることにより、さまざまな矛盾をきたしているという問題がある。

総じて言えば、チャンディに関する建築学的な研究は、個々の問題の所在は明らかにはなったものの、その各々について、深いレベルでの十分な議論が展開し尽くされてはいないという段階に留まっている。さらにそれらを総括する編年的な考察についても、各論の深化に応じた再構成が求められていると言えるだろう。

以上の問題に関連して、本論文で筆者が焦点を当てるのは、伽藍構成、とりわけヒンドゥー教寺院のそれである。ヒンドゥー教の遺構の数多くは、正方形ないし矩形の囲繞壁によって取り囲まれた敷地内に、数棟の祠堂を配してその伽藍が構成されている。そして一見して左右対称の構成が遵守されているように見えて、囲繞壁内に配置された祠堂群がわずかながら南北方向へずれているものが少なく無い。このような伽藍を、本論文では「非対称の伽藍構成」と呼ぶことにする。

既にこの現象については、オランダ領東インド考古局の建築ないし考古学関連の学者達を始めとして、インドネシア、フランス、日本などの研究者達によって、折に触れて論及されてきている。筆者の1996年7月から1998年9月までの2年2ヶ月に及ぶ現地滞在の経験を踏まえて受けた印象を記せば、とりわけインドネシアの考古学および建築学会の中で、多少なりともチャンディに関心を寄せている諸氏であれば、知らぬ者はいないという程にポピュラーな問題であると言っても過言ではない。一般向けに刊行されている書籍の中で、短い記述ながらこの現象について紹介されることもしばしばであり、遺跡にまつわる興味深い「謎」という位置付けのもと、一般読者の興味を喚起するための、言わば格好の題材の一つになっていると言えるだろう。

このように本問題は関係者には良く知られたものであると言えるが、それがまとまった形の一本の独立した論文として、または著書の一章を割いて詳述されている先行研究は存在しない。上記の祠堂群の「ずれ」がなぜ生じたのか。また非対称伽藍がいつ頃、どのような形でジャワ島に成立するに至ったのか。仏教寺院の伽藍と比較して相違はあるのか。これらの諸問題は依然として「謎」のヴェールに包まれている。

その「謎」の一端を解明すべくまとめたのが本研究であり、その目的は、古代ジャワのヒンドゥー教寺院の伽藍に認められる非対称的構成に着目した上で、その非対称伽藍に投影された象徴的意味・空間的特質について、ヒンドゥー教の祖地インドに残された文献の記述との対照、またジャワの仏教寺院の伽藍構成との比較、ひいてはバリの神観念をも視野に入れつつ明らかにすることである。

第 2 章

既往研究とそれに対する本研究の視点

既に述べたように、非対称の伽藍構成に係る問題は、折に触れて、さまざまな形で論及されてきたものであるが、しかしこれ程までに高い関心が寄せられ、またある意味で定説化されている問題であるにも関わらず、極めて基本的なレベルでの、十分な検証が決定的に欠けていることを筆者は確認している。筆者はこれまでに、インドネシアの各関連機関にアクセスしてチャンディの測量原図を収集し、また諸機関から刊行された出版物に掲載されたチャンディの図面を資料として入手したが、考察の対象とする遺構10例の内、チャンディ・ロロ・ジョングランを含む6例において、囲繞壁と祠堂群との位置関係を正確に伝える精度の高い伽藍配置図が今日まで作成されてこなかったことを確認している⁽¹⁾。

すなわち、建築学的な分析に必要な精度を有する図面等の具体的なデータに照らして、祠堂群の「ずらし」が実証的に明らかにされた研究は、これまで極めて部分的、限定的にしか行われていない。また、精度の粗い図面上で分析が行われた結果、明らかに事実を誤認しているケースも見受けられる⁽²⁾。伽藍配置の測量結果に基づいて祠堂群のずらし幅が数値的に検証され、その上で敷地の中心点が避けられるという結論が導かれる場合もあったとは推測されるが、その検証のプロセスが具体的に明示された研究もないというのが実情である。従って、建物群の偏向、つまり「ずれ」が、施工時における単なる誤差であるのか、あるいは意図的な「ずらし」であるのか、この点を明らかにする実証的な論証は、未だ行われていなかったと言わねばならない。逆に言えば、実証的な論証を欠いているにも係わらず、その結論のみ、つまり建物群の偏向が、当時の建築プランナーによる意図的な「ずらし」であるという見方が、先走る形でほぼ定説化され、なおかつ広く流布されるに至っているのが現状であると言える。

さて、続いて、「非対称の伽藍構成」が、各国の研究者諸氏によって、どのように言及されてきたのかについて、その概略を見ていくことにしよう。

管見の及ぶ限りで、本問題についての間接的な言及を伴う最も古い論考は、オランダ領東インド考古局のドウ＝ハーン氏によるものである。同局の1925年の年報には、チャンディ・キダルの発掘調査報告が含まれているが、その報告の中でドウ＝ハーンは、囲繞壁の開口部とその中に配置された祠堂とが同軸線上に配置されていないことに着目し、それは祠堂の内部で何らかの宗教的儀礼が執り行われる際に、囲繞壁の外から見えなくするための措置ではないかと指摘している⁽³⁾。翌1926年には、ボロブドゥールの最初の補修を行ったことで知られるファン＝エルプ氏によって、チャンディ・ロロ・ジョングランの主祠堂(チャンディ・シヴァ)及び副祠堂(チャンディ・ナンディ)の中心を通る東-西の軸線と、内苑の中軸線(東-西)とが、およそ「二メートル余り」もずらされていることが指摘されている⁽⁴⁾。

さらに1938年のオランダ領東インド考古局年報には、チャンディ・ロロ・ジョングランの伽藍構成について、以下のような重要な指摘がある。ほぼ正方形からなる周壁(内苑)の内側の四隅とその間には、計八基のチャンディのミニチュアが置かれているが、それらを相互に結んだ中心線の交点、つまり内苑の中心点にあたる箇所が、シヴァを祀る主祠堂の正面階段翼壁(南側)と基壇の交差する隅の部分に一致し、そこにも同形のチャンディのミニチュアが寄り添って建てられている。そのチャンディのミニチュアは、主祠堂四面の階段の両翼壁と基壇の隅に計八基配置されており、そのうち東正面南側のもの、すなわち内苑の中心点上に配置されたものに限り、他の七基とは異なり正面の入り口が解放され、またその内部には、十文字の刻線の施された切石が三段積まれていたことが報告されている。非常に簡略化された図面ながら、ロロ・ジョングラン内苑の伽藍配置図も付され、またそこに東-西、南-北それぞれの中心線が引かれ、その交点に符号する箇所、つまり内苑の中心点に、上記のチャンディのミニチュアが置かれていたことが、配置図上でも判るように配慮されている⁽⁵⁾。なお、後にフランス極東学院のジャック・デュマルセ氏は、一般向けの自著(1982年初版)において、この伽藍配置図を拡大してトレースしたと見られる図面を用い、祠堂群の「ずれ」について言及しているが、そのデュマルセにしても、およ

そ精確とは言い難いこの程度の図面しか用いる他はなかった点に問題があることは明らかであろう⁽⁶⁾。

また、1920年のオランダ領東インド考古局年報に掲載された報告において、チャンディ・スンプルナナスの主祠堂の正面（西）階段跡を示す凸部と基壇が交差する隅の部分に、台座状の切石が置かれていたことが先のドウ＝ハーンによって報告されており、また彼は「この階段とも基壇とも無関係としか思われない切石が、単なる偶然の所産であるのか、あるいは何らかの意図をもって配せられたものであるのか」と一旦問いを投げかける形でその結論を留保している⁽⁷⁾。同報告に掲載されたチャンディ・スンプルナナスの配置図、これも高精度とは言い難いものであるが、同図を見る限り、その切石は囲繞壁で区切られた寺苑のほぼ中央に位置しており、また囲繞壁内の4基の祠堂は、大きく南側に偏向して配置されることは最低限理解される。もっともこの段階でドウ＝ハーンが、敷地のほぼ中央に置かれた切石と、祠堂群の「ずれ」、またその両者の因果関係にいかなる推論を持っていたのかは定かではない。ひとまず彼は慎重にも何らかの解釈の提示を避けているが、後の議論の進展を見る上で、最初の一步を跡付ける重要な問題提起になっているとは言えるであろう。

1920～30年代の段階で、既に上記のような指摘が成されていることは注目に値する。しかし戦乱の時期にあたる1940年代には、この問題に別の角度から光を当てる新資料の提示、ないし新たな議論の進展は見当たらない。恐らくこの期間は、議論の成熟を俟つための猶予期間として、考古局局員達にとって一定程度の意味を持っていた筈である。そして1949年、オランダ領東インド考古局がインドネシア共和国考古局へと改称された後、1954年に刊行された考古学報告書において、考古局には珍しい建築家のファン＝ロモントは、数多くのチャンディにおいて、祠堂群の意図的な「ずらし」が認められる点、また神聖視された敷地中心点の直上を建物の主要部が占地することのないように配慮されている点、そしてその地点上に、敷地中心の位置を指し示す指標物が置かれる点に言及している⁽⁸⁾。残念ながらファン＝ロモントが例示しているのはチャンディ・ロロ・ジョングランだけであり、他の類例については「数多くの」とは指摘しているものの、具体例を列挙して各々について説明をしている訳ではない。

いずれにしても、寺院の敷地中心点が非常に神聖な箇所と見なされた結果、その地点を避けるかのように祠堂群がずらされている、との見方がこの時点ではっきりと明示されている点には留意が必要である。そしてこの解釈は、オランダ領東インド考古局局長も務めたバーネット＝ケンペルス、また彼の直弟子であり、後にインドネシア人として初めてインドネシア考古局局長の座に付くスクモノによって補強され、また「ずらし」が設けられる理由についても、彼らによって新たな解釈が提出されることになる。

ファン＝ロモントが上記の説を提示した同じ年に、バーネット＝ケンペルスは、ロロ・ジョングランについて次のように書き記している。

・・・主神像は（伽藍の）幾何学的な中心ではなく、その北西に置かれることになる。このように、中心を外して聖域を設ける配置は、他の数多くの聖所においても確認される（例えば、グヌン・ウキル、ムラク、バドゥ、キダル）。インドネシア以外では、やはり良く知られた事例がある。インドの諸文献の中では、神像ないし建物の主要部を、建設用地の上に描かれた図形上の交点に置くことが禁じられている。この種の図は、チェス盤のような64、ないし81の格子によって構成されるもので、中でも最も「傷付き易い」地点は、中心線と対角線の交点とされる⁽⁹⁾。

バーネット＝ケンペルスは、先のファン＝ロモントの問題意識を継承的に発展させる形で、敷地の中心が意図的に避けられる論拠を、インドの関連文献の記述の中に求めている。その文献と

は、ヴァーストゥ・シャーストラ、あるいはシルパ・シャーストラという名称で呼ばれるサンスクリット語による一連の建築書を指すことは明らかである。バーネット＝ケンペルス自身は、これらの原典に直接当たっている訳ではなく、引用頁の明示も無しに、ハイネ・ゲルデルンやステラ・クラムリッシュによるヴァーストゥ・シャーストラについて論及した論文・著書を参考文献として挙げているに過ぎない。比較的近年になって、「残念ながら」と前置きをしつつヨルダーン氏も指摘しているように、バーネット＝ケンペルスは、建設用地の上に描かれる図形上の特定の地点を「傷付き易い」箇所と見なし、その地点上に神像や建物を置くことをタブー視するという文言が、具体的にどの文献に記載されているかについて言及していない⁽¹⁰⁾。またここでいう「図形」とは、いわゆる「ヴァーストゥ・プルシャ・マンダラ」に他ならず、ヒンドゥー寺院の建築空間の象徴的意味を考える上で極めて重要な鍵の一つとなる概念である。

現存するヴァーストゥ・シャーストラの殆どに、かなりの分量を割いて詳細に記述されているのが、「ヴァーストゥ・プージャー」等の名で呼ばれる地鎮祭儀礼であるが、この儀礼の中では、住宅等の世俗の建築、また宗教建築を問わず、それらを造営する際に、その敷地の上にグリッドに区切られた正方形の図形を描き、またそこで「ヴァーストゥ・プルシャ」と呼ばれる土地を支配する一種の精霊と、ブラフマー神を始めとする様々な神々が勧請されて、供養が行われる。この時に描かれる8×8, 9×9等のグリッドとして表された図形が、「ヴァーストゥ・プルシャ・マンダラ」と呼ばれるものである。

バーネット＝ケンペルスは、マンダラという言葉を用いていない。しかしそれとロロ・ジョングランとの関係を示唆しつつ、同時にグヌン・ウキル、ムラク、バドゥ、キダルを類例として挙げている訳であるが、比較的正確な伽藍配置図が作成されているチャンディ・キダルを除けば、彼がこの論考を著した折に、グヌン・ウキル、ムラク、バドゥの三遺構に関して、高精度の配置図は作成されていなかった可能性が高いことは指摘しておかねばならない。少なくとも筆者が渉猟した限りにおいて、その時点で報告類に伽藍配置図の存在は確認されない。とりわけチャンディ・ムラクについて言えば、1955年にスクモノがインドネシア大学へ提出した卒業論文の中で述べているように、その時点で囲繞壁の発掘は行われておらず、従って祠堂群の「ずらし」の有無を判別することは出来なかった筈である。またこの論文の中でスクモノは、グヌン・ウキル、スンプルナナス、バドゥに加え、ジャウィ、キダル、そして恐らくはムラクもロロ・ジョングランの類例であると指摘しているのであるが、バーネット＝ケンペルスと同様、それらを類例と見なし得る具体的な根拠、例えば図面類、測量データ等は一切提示されておらず、いずれにしても類例の悉皆的な調査としては不十分であった感は否めない⁽¹¹⁾。

また後の1974年、スクモノは自身の博士学位論文の中で、ロロ・ジョングラン、スンプルナナス、キダルに認められる祠堂群の「ずらし」が、他の全てのチャンディにもあまねく認められる現象か否かという問題の検討は、未だ手がつけられていないと指摘している⁽¹²⁾。スクモノが「全てのチャンディ」という時に意味する範疇は、実はヒンドゥー教寺院のみならず、仏教の寺院をも含んでいる。これまでに名前の挙げた様々なチャンディは、全てヒンドゥーの遺構であるが、果たして仏教寺院の伽藍にも、祠堂群の「ずらし」は認められるのであろうか。

例えばデュマルセは、「ずらし」を伴う遺構の伽藍、つまり非対称伽藍が、ヒンドゥー教寺院だけではなく、仏教寺院にも適用されているとほぼ断言に近い形で指摘しているが、その見解を裏付ける具体的な根拠が示されていない限り、改めて各事例の考察を行う必要がある⁽¹³⁾。また一方でアノム氏も、「中心を避ける」という発想自体が、ヒンドゥー教及び仏教の遺構に共通したものであると指摘しているが⁽¹⁴⁾、それに対し筆者はやや異なる見方を有している。既にしばしば指摘されているように、両宗教の寺院を構成する各祠堂は、その平・立・断面の構成や材料、構法等の面で典型的であるだけでなく、装飾的彫刻に至っては共通のモチーフが随所に用いられるなど、全般的な造型表現が示す傾向は、ほぼ同一の類型を示していると言って良い⁽¹⁵⁾。それでは、

それらの祠堂が一群となって造られる伽藍全体の構成についても、やはり両宗教のチャンディは共通の類型を示すと言えるのか。伽藍の対称性という観点から、両者の比較を行うことには一定の意味があるものと考えられる。

スクモノは、前述の博士学位論文の中で、敷地中心点が特別視され、またその地点を避けて祠堂群を配置する理由について、先のバーネット＝ケンペルスと同様、ステラ・クラムリッシュの著作を引用した上、「ヴァーストゥ・プルシャマンダラ」の影響を想定し、このマンダラの上でとりわけ十分な注意を払って避けられるべき「傷付き易い」地点が、ブラフマー神の場所とされる中央の区画（ブラフマスターナ）の内外の地点とされることを根拠として挙げている⁽¹⁶⁾。さらにスクモノの新たな着眼として注目されるのは、特別視されるのは寺院敷地の中心点だけではなく、東西南北の四方位、また北東、南東、南西、北西の四維、これら八方位に位置する地点も同時に特別視されるという点である⁽¹⁷⁾。確かに、チャンディ・ロロ・ジョングランの内苑では、敷地中心点に置かれたチャンディのミニチュアと同形の小塔が、内苑の八方位に位置する地点にも置かれている。そしてもう一例スクモノが取り上げているのはチャンディ・グラであるが、やはり同遺構でも、敷地の八方位に位置する地点にはチャンディのミニチュアが置かれ、またその内部にはリング状立石の納められていたことが指摘されている⁽¹⁸⁾。しかしこの二例以外の遺構で、果たして同じように、敷地の八方位に位置する地点が特別視される傾向を看取出来るのだろうか。

そしてスクモノは、古代ジャワにおけるシーマ定立の儀礼に際し、シーマとされる土地を区画する際にリング状立石の置かれると見られる事例があることにも言及しており、聖域を区画する際にリング状立石を敷地隅に配するという点で、上記のチャンディの寺苑との共通性が見出せると述べている⁽¹⁹⁾。そしてスクモノの注目すべき着眼としてもう一点。チャンディの伽藍において、敷地の中心点及び8方位に位置する地点に特別な位置付けが成される。とこのような考え方が、現在のバリでナワ・サンガと呼ばれるヒンドゥーの宇宙を象徴する神々の体系へと継承されているという指摘には、看過出来ない重要な問題が含まれている⁽²⁰⁾。チャンディの敷地の中心点、そして8方位に位置する地点に標石が置かれ、またそれらがシヴァのシンボルとされるリングの形状を取る場合がある限り、またその敷地全体に、神々の集合たるヴァーストゥ・プルシャ・マンダラの影響をも想定するのであれば、標石に表象された象徴的意味を、ヒンドゥーの神格との関わりから検討する余地は、十分に残されているといえるであろう。

また他方でスクモノは、チャンディ・ムラクの屋蓋の龕に安置された神像の図像学的な分析から、中部ジャワ期のジャワに、既にナワ・サンガの観念が存在していたとほぼ断定に近い形で指摘している。しかし荒廃著しい状態で発見されたチャンディ・ムラクに残された遺物から得られる断片的な知見のみが根拠とされる割には、やや結論を急ぎ過ぎているようにも思われる⁽²¹⁾。ナワ・サンガの観念がジャワに由来すると見て良いのか、またそうであれば、それが成立した経緯はいかなるものであったのかという問題については、遺構・遺物から得られる実証的知見及びジャワの歴史的な文献資料の記述の両面から、より慎重かつ精緻な議論の展開される必要があるものと考えられる。

ジャワのチャンディの寺院伽藍に表象された神観念の問題を、インドからの影響、そしてバリ・ヒンドゥーへの発展的な継承、という両面から分析することによって、いわゆるジャワ島の「インド化」(インディアナイゼーション)の問題における、「土着化」(ローカライゼーション)の側面に対する新たな見方を、寺院伽藍に投影されたヒンドゥーの神観念という極めて限定的な枠組みの中ではあるが、提示することが出来ると考えている。

続いて、非対称の伽藍構成を有するチャンディが、いつ頃、どのような形でジャワ島に成立するに至ったのか。これについてはデュマルセが、9世紀前半頃の中部ジャワ南部におけるヒンドゥー教勢力の復興（これをデュマルセは「ヒンドゥー・ルネッサンス」と呼んでいる）に伴って成立した新たな配置形式である可能性を指摘している⁽²²⁾。しかしこの解釈は、今からおおよそ半

世紀も前にドウ＝カスパリスによって編まれた中部ジャワの政治史に拠る所が余りにも大きい。カスパリスの説は、ヒンドゥー教及び仏教という異なる宗教を信奉する二つの王朝の対立的な関係を軸に論証されていたものであるが⁽²³⁾、デュマルセがチャンディの編年を行う際に依拠する歴史観は、「ルネッサンス」という言葉の使用からも窺い知れるように、カスパリスによる前記の説を更にエスカレートさせて、二王朝の、ひいては二宗教の対立的な関係を更に強調したものであるという感が拭えない。

そもそも、中部ジャワ政治史の諸説は、ジャワ、スマトラ、マライ半島、インド等の各地で発見されている限られた数の刻文史料と、中国史書の記述とによって構築された多くの仮説を包含するものであり、さらに新史料の発見に伴って、今なお改訂される余地の残されているものである以上、史的背景に多くを依存したチャンディの編年論には、自ずから限界があると言わざるをえない。そして比較的近年の刻文研究の成果は、中部ジャワ期の政治史に関しても従来とは全く異なる理解の枠組みを示しており、例えば8～9世紀前半における中部ジャワにおける権力の均衡について言えば、統一王権による政治的統合が実現する前の段階、つまり分散的に併存していた多数の地方権力が統合されていく過程と捉えている⁽²⁴⁾。そしてこの解釈は、中部ジャワ期の政治史の新たな枠組みとして、徐々にではあるが定説化される傾向にある。さらに中部ジャワ期に存在していたことが確認されるヒンドゥー教及び仏教についても、対立的な異宗と見るのではなく、シンクレティックな併存という観点から見直すべきとする論考も、折に触れて提出されてきているのが現状である⁽²⁵⁾。

中部ジャワ史の再構築の必要性が説かれている中で、依然としてデュマルセは、780年頃から832年頃までを、中部ジャワ南部における仏教王朝シャイレンドラの盛期、逆にヒンドゥー教勢力の完全なる空白期と見なし、その間にヒンドゥー教チャンディが中部ジャワ南部に造営されていた可能性を予め捨象した上、832年以後、仏教勢力に対して従属的な立場に甘んじていたヒンドゥー教勢力がその支配から脱し、「復興」していくのに歩を合わせる形で、非対称の伽藍構成が新たな配置型式として、インドからジャワへもたらされたと指摘している。繰り返しになるが、このような特定の政治史に立脚した立論自体に、そもそもの無理があると言わざるをえない。

デュマルセの見解として、もう一点特記しておきたいのは、チャンディ・ロロ・ジョングランの内苑の中心点に置かれた小塔について「恐らくは土着的な地神に捧げられたもの」と言及している点である⁽²⁶⁾。残念ながらデュマルセは、この見解を裏付ける具体的な根拠を全く示していない。筆者にしても、この解釈を直証ないし傍証する根拠を提示するのは極めて困難と思わざるをえない。かろうじて、ジャワ島に今なお残ると言われる様々なアニミズム的な精霊信仰を想起した時に、管見の及ぶ限りにおいて、ジャワにおいて突出した地神信仰が認められないとはいえ、デュマルセの上記の説も完全には否定は出来ないと思うに過ぎない。

確かにチャンディ・ロロ・ジョングランの場合、内苑の中心点に置かれているのはチャンディのミニチュア、小塔であるが、後に本論で述べるように、他の類例の中には、寺苑の中心点と見られる箇所に、リング状立石の置かれる場合がある。言うまでもなくリングは、シヴァ教の中で最も重要なシンボルの一つとされるものである。そしてこれらの寺院が、インド伝来のヒンドゥー教ないし仏教の影響を受けて造られたものである限り、その外来宗教の文脈の中で、伽藍の非対称性の問題を解く鍵を探ることに、一定の意義があることは言うに俟たないであろう。先に述べた、ヴァーストゥ・プルシャ・マンダラの影響を説くバーネット＝ケンペルスやスクモノによる解釈は、その点で一考の価値があると言える。

ヴァーストゥ・プルシャ・マンダラの理論と実際について、既往研究の推移とその問題点に鑑みた上で、近年になって包括的な考察を行ったのが小倉氏である⁽²⁷⁾。その小倉氏が注目したのは、インドのタミル・ナードゥ州におけるチョーラ朝初期の寺院の本殿内における、ガルバグリハ（聖域、内陣）の「ずれ」、そしてその結果としてのリングの「ずれ」、すなわち本殿の中心軸からの

リングの「ずれ」の問題である。小倉氏は、関連するヴァーストゥ・シャーストラ文献に記された、ガルバグリハ内におけるリングや神像の微少な「ずらし」に関する規定、さらにマルマン（急所）の規定を引きながら、上記の「ずれ」は意図的な「ずらし」とであると結論している。そしてこうしたインドに見られる意図的な「ずらし」の慣行が、内苑における本殿（チャンディ・シヴァ）の「ずらし」という幾分異なる文脈の中で、遠く海を隔てたジャワにまで、意外なほどの広がりを持っていた可能性を示唆している⁽²⁸⁾。

以上、ジャワ島のチャンディの非対称伽藍について、各々の研究者が何をどこまで明らかにしているのかについて述べた。問題の所在について改めてまとめて見ると、

1. ほぼ定説化されているように見える祠堂群の「ずらし」の問題ではあるが、それを論証する上で不可欠のものと考えられる、高精度の伽藍配置図が作成されていない遺構が多い。それはとりもなおさず、祠堂群の「ずれ」が、施工時における単なる誤差の類ではなく、意図的な「ずらし」と言い得るのかどうかという問題について、図面等の具体的なデータに基づいた論証は未だ充分に行われていないことを意味する。
2. それに加え、非対称の伽藍構成を有する遺構例を網羅した上で、その伽藍配置を種々の見地から分析し、あるいは統合して考察する悉皆的な研究も不十分である。
3. 非対称の伽藍構成を有するチャンディが、いつ頃、どのような過程を経て成立したと見られるのかという問題に関し、デュマルセが自説を提示しているが、特定の中部ジャワ政治史に立脚したその解釈には基本的な問題がある。
4. 祠堂群の「ずれ」を意図的な「ずらし」と見ることが出来るのであれば、既往研究が教えるように、そこにヴァーストゥ・プルシャ・マンダラの影響を認め得るのか。バーネット＝ケンペルス及びスクモノの解釈は、インドの文献に直接あたって導き出されたものではないという点に問題があり、また敷地中心点が避けられるという点のみを根拠として、ヴァーストゥ・プルシャ・マンダラとの関係を論じて良いものかどうかは、改めて議論の余地がある。
5. スクモノは、チャンディの伽藍に投影された神観念の問題を、インドからの影響（ヴァーストゥ・プルシャ・マンダラ）、そしてバリへの持続的な発展（ナワ・サンガ）という二つの文脈の中で捉えている。しかしバリの神観念との係わりを論じるには、余りにも具体的な根拠に乏しく、このスクモノによる示唆が単なる思い付きの類なのか、一定の蓋然性を有するものであるのかは、中部・東部ジャワに残された文献及び遺構・遺物の両面から、より詳細な検証が必要である。
6. デュマルセやアノムは、非対称の伽藍構成における、「中心を避ける」という発想自体が、ヒンドゥー教及び仏教の寺院に共通して認められる特徴とほぼ断言に近い形で指摘しているが、両宗教の寺院の伽藍配置に認められる特質の比較分析は、未だ十分に行われているとは言い難い。

そして、「1.」及び「2.」の問題に対する筆者の解答が、そのまま本論第1章となる。また「3.」、「4.」、「5.」、「6.」の各々の問題に対応する形で、第2章、第3章、第4章、第5章をまとめて、本論とすることにしたい。

- (1)ある程度の精度を有する伽藍配置図が作成されているのは、チャンディ・グヌン・サリ、チャンディ・バドゥ、チャンディ・キダル、チャンディ・ジャウイの四遺構のみである。
- (2)アノム氏 (I. G. N. Anom) は、博士学位論文の中で、中部ジャワのチャンディの配置計画についてまとめている。中部ジャワの遺構例をある程度網羅した上で、配置図を用いて分析を行った研究としては唯一のものであるが、そこで使用されている図面の多くが、建築学的な分析に必要な精度を有するものではないことを筆者は確認している。またこの研究で対象とされたチャンディは中部ジャワの遺構に限定されており、東部ジャワの遺構をも含めて配置計画を分析した研究は行われていない (Anom, I. G. N., *Keterpaduan Aspek Teknis dan Aspek Keagamaan dalam Pendirian Candi Periode Jawa Tengah (Studi Kasus Candi Utama Sewu)*, Ph.D. thesis Universitas Gadjah Mada, Yogyakarta, 1996, pp. 353-371)。
- (3)Haan, B. De, “Tjandi Kidal”, *Publicaties van den Oudheidkundigen Dienst in Nederlandsch-Indië-I*, Batavia, 1925, pp. 6
- (4)Erp, Th. van, “Overzicht van bedenkingen tegen de details der op het terrein uitgevoerde reconstructies van den Çiwa-tempel van Prambanan”, *Verslag van de commissie van advies inzake de restauratie der Hindoe-Javaansche monumenten, nopens de reconstructie van den Çiwatempel te Prambanan*, Weltevreden: Kolff, 1926, p. 16
- (5)*Oudheidkundig Verslag, Oudheidkundig Verslag van de Oudheidkundige Dienst in Nederlandsch-Indië, Oudheidkundig verslag*, Batavia: Albrecht, Bandung: Nix., 1938, pp. 6-7
- (6)Dumarçay, J., *The temples of Java*, Singapore: Oxford University Press, 1986, p. 40
- (7)Haan, B. De, “Tjandi Soembernans”, *Oudheidkundig Verslag, Oudheidkundig Verslag van de Oudheidkundige Dienst in Nederlandsch-Indië, Oudheidkundig verslag*, Batavia: Albrecht, Bandung: Nix., 1920, pp. 25-31 に添付された図 VI
- (8)Romondt V. R. van, “Sebuah tjandi timbul kembali”, *Amerta: warna warta kepurbakalaan* No. 2, Djakarta : Dinas Purbakala Republik Indonesia, 1954, p. 36
- (9)Bernet Kempers, A. J., “Prambanan, 1954”, *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde* 111, 1955, p. 8
- (10)Jordaan, Roy E. ed, *In praise of Prambanan: Dutch essays on the Loro Jonggrang temple complex*, Leiden: KITLV Press, [Translation Series 26], 1996, p. 67
- (11)Soekmono, R., *Tjandi Merak*, Skripsi Sarjana Universitas Indonesia, Jakarta, 1953
- (12)Soekmono, R., *Candi: fungsi dan pengertiannya*, Ph.D. thesis Universitas Indonesia, Jakarta, 1974, p. 234
- (13)前掲書注 (6)p. 78
- (14)前掲書注 (2)pp. 353-371
- (15)千原大五郎「中部ジャワのチャンディ建築史に対する一考察」『日本建築学会論文報告集』第221号, 日本建築学会, 1974, pp. 31-32; 同『インドネシア社寺建築史』日本放送出版協会, 1975, pp. 99-103; 小野邦彦・河津優司「インドネシア, ジャワ島のチャンディ」『アジアの歴史的建造物の設計方法に関する実測調査研究』(文部省科学研究費・研究成果公開促進費採択刊行図書) 第2篇, 早稲田大学アジア建築研究室, 1999, pp. 40-45, 51-52
- (16)前掲書注 (12)p. 239
- (17)前掲書注 (12)p. 236
- (18)Soekmono, “Gurah, the link between the Central and the East-Javanese arts”, *Bulletin of the*

- (19) 前掲書注 (12)pp. 229-235
- (20) 前掲書注 (12)pp. 235-237
- (21) 前掲書注 (12)p. 237
- (22) Dumarçay, J., *Candi Sewu dan arsitektur bangunan agama Buda di Jawa Tengah*, Jakarta: Puslit Arkenas, [Originally published in France, Paris: EFEO, 1981; translated by Winarsih Arifin dan Henri Chambert-Loir], 1986, pp. 39-40
- (23) Casparis, J. G. De, *Inscripties uit de cailendra-tijd*, Bandung, 1950
- (24) Naarssen, F. H. van / R. C. de Jongh, *The Economic and Administrative History of Early Indonesia*, E. J. Brill, Leiden / Köln, 1977, 深見純生「ジャワ古代史の再構築 - シーマ定立の政治経済学」『岩波講座 世界歴史』, 南アジア世界・東南アジア世界の形成と展開』岩波書店, 1999, pp. 361-362
- (25) Jordaan, Roy E., *Imagine Buddha in Prambanan; Reconsidering the Buddhist background of the Loro Jonggrang temple complex*, Leiden: Vakgroep Talen en Culturen van Zuidoost-Azië en Oceanië, [Semaian 7.], 1993
- (26) Dumarçay, J., “Prambanan and Architecture”, *Ancient History*, Singapore: Indonesian Heritage, [John Miksic ed.], 1996, p. 78
- (27) 小倉泰「南インドのヒンドゥー寺院の象徴性 ② - ヴァーストゥプルシャマンダラと寺院の平面設計」『東洋文化研究所紀要』第115冊, 東京大学東洋文化研究所, 1991, pp. 1-64; 「中世都市ヴィジャヤナガル-ヒンドゥー王都のレイアウトとその解釈」『東洋文化』72, 1992, pp. 165-189; 「タミル・ナードゥにおける王権と寺院 - 王の神格化をめぐる」『東洋文化研究所紀要』第118冊, 東京大学東洋文化研究所, 1992, pp. 87-125; 「聖化された空間 - 建築」『インドの夢・インドの愛 - サンスクリット・アンソロジー』(上村勝彦・宮元啓一 編) 春秋社 1994, pp. 382-410; 「ガルバ・グリハの『ずらし』とマルマン: ヒンドゥー寺院の設計に関する新たな解釈」『今西順吉博士還暦記念論集: インド思想と仏教文化』, 1996, pp. 123-139; 『インド世界の空間構造: ヒンドゥー寺院のシンボリズム』(東京大学東洋文化研究所研究報告) 春秋社, 1999
- (28) 前掲書注 (12)p. 237 小倉氏は, インドの例を取りジャワの問題に触れているが, ジャワ以外の事例として 溝口氏が東北タイのクメール寺院におけるわずかな中心軸の偏向に言及していることが特記される。溝口氏は, 前アジアの時代の民俗方位に認められる境界性を帯びた「中心」と, 専制王権の成立に伴い生じた四方位という周縁に支えられる「中心」という, ふたつの「中心」が矛盾することに「ずらし」の原因を求めている(溝口明則「東北タイのクメール寺院建築」『アジアの歴史的建造物の設計方法に関する実測調査研究』(文部省科学研究費・研究成果公開促進費採択刊行図書), 早稲田大学アジア建築研究室, 1999, pp. 17-22)。氏によるこの注目すべき解釈は, クメール寺院の伽藍配置に認められる中心軸の偏向を, 「方位システム」という観点から, 汎アジア的・超宗教的なレベルで説明しようとするものである。こうしたアプローチは, ヒンドゥー教の世界観と図像に限定して「ずらし」の原因と意味を検討する本稿の域を越えるものである。

第 3 章

本論文の構成

本論文は、序論1章3節、本論5章28節、および結論からなる。序論第1章では、まず本研究の目的を述べ、続く第2章ではジャワのチャンディの非対称伽藍に関する既往研究の成果をまとめ、併せてその問題点を抽出した上で、それに対する筆者の視点を箇条書きし、続く本論各章との対応を示している。また第3章では本論文の構成を述べた。

本論第1～5章では、次の要点に主眼を置き、各々の分析を行った。

第1章

主に筆者が作成した伽藍配置図を基に、祠堂群の「ずれ」の様態を分析して、本当に敷地中心点が避けられていると見て良いのか、つまりそれらの「ずれ」は単なる施工誤差ではなく、意図的・計画的な「ずらし」と見なし得るのかという基本的な事実の確認をも含めて、既往の論説の再検証・補訂を試みると同時に、ヒンドゥー教(シヴァ教)の各遺構10例を個々に分析し、それらの伽藍配置に認められる特質について検証を行った。

第2章

ディエン高原のチャンディ・アルジョノに代表される中部ジャワ北部山間地のヒンドゥー教の遺構群が、祠堂の建築構成、細部意匠、尊像構成等の面で、中部ジャワ南部のシヴァ教寺院の祖型と見るに相応しい特徴を顕著に備えている点について、既往の説の再確認を行った。そしてその点を踏まえた上で、非対称の伽藍構成が中部ジャワ南部の地に成立した史的背景について、モルディング構成、基壇型式をも視野に入れつつ明らかにした。

第3章

第1章で明らかにしたシヴァ教寺院の非対称伽藍の諸特質に鑑みながら、インドの建築書の読解に基づいた上で、祠堂群の「ずらし」がなぜ生じるのかという問題について、インドのヴァーストゥ・プルシャ・マンダラの觀念の影響を説く従来の説の再検討し、また非対称伽藍に投影された神格配置とバリのナワ・サンガの觀念との関わりを考究した。

第4章

ヒンドゥー教世界の各方位を司る神々の概念、すなわち宇宙論的秩序の下に、ある特定の神が一定の方角と関係を有するという思想に着眼し、その方位神の体系が寺院の伽藍構成に与える影響について論及した。併せて中部・東部ジャワのシヴァ教遺構で発見された神像の神名比定及びそれらの原位置に関する図像学的な分析に係る既往研究を渉獵し、古ジャワ語文献の記述にも拠りながら、ジャワに存在したことが確認される「方位神」の各種体系を分類し、さらにその発展系列について筆者の解釈を提示した。

第5章

最終章の第5章では、中部ジャワの重要な仏教チャンディであるボロブドゥール、チャンディ・セウ、チャンディ・ルンブン、そしてチャンディ・プラオサン・ロールについて、伽藍に投影された宗教的觀念の問題を踏まえつつ、伽藍の対称性という観点から考察を行った。さらにヒンドゥー教の遺構群に見る非対称伽藍との相違を明らかにして、各々の宗教が有する伽藍配置に見る特質について考察を行った。

最後に、本論各章にて得られた見解を総括的にまとめてそれを結論とした。